

第四講 『土佐日記』

次の文章は紀貫之『土佐日記』の際末尾で、著者が足かけ六年に及ぶ土佐在任ののち、京の自邸に帰りついた際のことを述べた部分である。これを読んで、後の問いに答えよ。

夜ふけて来れば、所々も見えず。京に入り立ちてうれし。家に至りて、

門かどに入るに、月明あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、

言①ふかひなくぞこぼれ破やぶれたる。家に預あずけたりつる人の心も、荒れたるな

りけり。中垣あながきこそあれ、一つ家のやうなれば、望①みて預②かれるなり。さ

るは、便たよりごとに物も絶えず得させたり。今夜こよひ、「かかること」と、声高こゝろだか

にももの言はせず。いと②はつらく見ゆれど、志こころざしはせむとす。
※

さて、池めいてくぼまり、水みづける所あり。ほとりに松もありき。五年いっどせ

六年むとせのうちに、**A**や過ぎにけむ、かたへはなくなりけり。今生おひた

るぞAまじれる。大方おほかたのみな荒れにたれば、「あはれ」とぞ人々いふ。思ひ

出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女子おんなごの、もろ②

ともに帰かへらねば、いかがは悲しき。
※ 船人ふなびとも、みな子たかりてののしる。かか

るうちに、なほ悲しきに堪たへずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

生まれしも帰らぬものをわが宿やどに小松のあるを見るが悲しさ

とぞいへる。なほ飽あかずやあらむ、またかくなむ。

見し人の松のちとせに見ましかば遠く悲しき別れせましや^b

忘れ難く、^③口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、疾く破^{とや}

りてむ。

(注) ※志：お礼の贈り物。

※船人：船旅をして作者とともに帰ってきた人々。

問一 空欄Aに入れるのに最も適切な語を次の中より選び、符号で答えなさい。

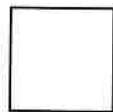
- ア 一日^{ひとひ} イ 五十日^{いじつか} ウ 一年^{ひととせ} エ 十年^{ととせ} オ 千年^{ちとせ}



問二 傍線部①②③の語句の意味として最も適切なものを次の中より選び、それぞれ符号で答えなさい。

① 言ふかひなく

- ア 言うほどのことでもなく
イ 言っても仕方のないくらい
ウ 言うまでもなく
エ 言えば言うほど
オ 言う以上に



② さるは

- ア そこで
イ そして
ウ まして
エ そのうえ
オ それでも



③ 口惜しきこと

- ア このうえなく楽しいこと
イ 残念で心残りなこと
ウ 口に出すのも惜しいくらい大切なこと
エ 悔しくて情けないこと
オ つまらないこと

問三 傍線部(1)「望みて預かれるなり」、(2)「ものも言はず」の主語を次の中より選び、それぞれ符号で答えなさい。

- ア 従者たち イ 作者 ウ 同船した人々
エ 家の留守を頼んだ者 オ 作者の妻

(1)

(2)

問四 傍線部A「ぞ」は係助詞である。この係助詞の結びを語の単位で答えなさい。

問五 傍線部a「中垣こそあれ」の解釈として最も適切なものを次の中より選び、符号で答えなさい。

- ア 中垣はあるので イ 中垣はあるけれど
ウ 中垣はあるようだが エ 中垣はあるよ
オ 中垣は仮にあっても

問六 傍線部b「見し人の松のちとせに見ましかば遠く悲しき別れせましや」の歌に使われている「ましかば——まし」の文法的意味として最も適切なものを次の中より選び、符号で答えなさい。

- ア 意志・希望 イ 伝聞・推定 ウ 反実仮想
エ 仮定・婉曲 オ 推量・否定

問七

波線部1「いとはつらく見ゆれど」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中より選び、符号で答えなさい。

ア 京の自宅に到着するまでの船旅のつらかったことを思う気持ちが起こったから。

イ こわれた家の様子を見てこれからの生活に不安を感じる気持ちが起こったから。

ウ 家の様子の変わりようを見て人の世をはかなく思う気持ちが起こったから。

エ 家の留守を頼んだ者の無責任な態度を見て不満の気持ちが起こったから。

オ こわれた家の様子を見てとても住めないと悲観した気持ちが起こったから。



問八

波線部2「もろともに帰らねば」とあるが、「女子」はおんなごどうして一緒に帰京しなかったのか。本文中の歌二首を読んで、その理由として最も適切なものを次の中より選び、符号で答えなさい。

ア もはやこの世の者ではない、帰らぬ人となってしまうたから。

イ 作者との折り合いが悪く、帰京するのをいやがったから。

ウ 病気のために土佐国に置いてこなければならなかったから。

エ 船旅は女子にとって危険であるために土佐国に残してきてしまったから。

オ 縁あって別の土地に嫁いで行ってしまっていたから。



第四講

『土佐日記』（九三五年）

作者 紀貫之

最初の仮名日記。日記体による紀行文。土佐の守かみ（国司こくし）の任期（任命されたのは九三〇年六〇歳の時、任期は四年）を終えた紀貫之が承平四年二月二日に土佐の館を出発し、翌年の九三五年二月十六日に京の自宅に帰り着くまでの五五日間の船旅日記。女が書いた形にして仮名文を用いた。文章の中で「あるじ・ある人・船君ふなきみ・父・翁おきな」と出たら作者。

冒頭は「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり（＝男も書くと聞いている日記というものを、（女の）私も書いてみようと思つて書くのである）」。任地土佐で亡くなった愛児（娘）への悲しみ・船旅への恐怖・帰郷の喜びなど。

- ・男↓漢文（漢字⇕真名まな）……………記録・事実
- ・女↓和文（仮名）……………心情・心中

紀貫之といったら

『土佐日記』

『古今和歌集』の撰者

『古今和歌集仮名序』（歌論）の著者

かんだちめ
上達部 (1~3位) → [くぎょう公郷ともいう]

てんじょうびと
殿上人 (4~5位) → [うえびと上人・うんかく雲客ともいう]

じげびと
地下人 (6位以下)

へちよつと覚えておこう！へ

文中の
こそ——已然（、）
は逆接

さすがに
さりとも
さるは

そうはいつでもやはり

ののしる【罵る】

- ① 大声で言い騒ぐ
- ② 噂（評判）になる

なほ

- ① やはり
- ② さらに・もつと

文中の
「ものを」は逆接
文末の
「ものを」は（逆接）詠嘆

助動詞す・さす・しむ

す・さす・しむ…(使役・尊敬)↓未然形に接続

しむ	さす	す
しめ	させ	せ
しめ	させ	せ
しむ	さす	す
しむる	さする	する
しむれ	さすれ	すれ
しめよ	させよ	せよ
尊敬 使役		

- ① 使役…(〜セル・〜サセル)
- ② 尊敬…(〜ナサル・オ〜ニナル)

ポイント

① 「す(せ)」「さす(させ)」「しむ(しめ)」の直後に
 尊敬語(給ふ・おはします)がなかったら絶対使役。

単独の「す」「さす」「しむ」は使役と覚えておこう

・今日、破籠わりご持たせて来たる人

・さるは、便りごとに物も絶えず得させたり。

② 「す」・「さす」・「しむ」が尊敬の時は直語に尊敬語がある

ただし「す」・「さす」・「しむ」の直語に尊敬語があっても「す」・「さす」・「しむ」は使役の時もあるので注意

・御帳みちやうのうちを通らせ給ふ(尊敬)

・隨身ずいじんにうたはせ給ふ(使役)

・源氏の物語を人にま読ませ給ひつつ(使役)

↓
◎

◎ 「す」・「さす」・「しむ」の上に対象を表す格助詞「に」があつたら使役と覚えておこう(「に」の上はほとんど人物)。

※ 「す」は四段・ナ変・ラ変の未然形(Ⅱ a 段)に接続し、「さす」はそれ以外の未然形(Ⅱ a 段以外)に接続。

あく【飽く】

⊕満足する ⊖いやになる

あかず ←

⊖満足しない ⊕①いやにならない

②名残惜しい

「や」と言ったら疑・反(係助)か詠嘆(間投助)

動詞十がたし

①くできない

②くしにくい

あたらし【惜し】

くちをし【口惜し】

くやし【悔し】

ほいなし【本意無し】

をし【惜し】

残念である

助動詞まし

まし：(反実仮想・推量・ためらい) ↓ 未然形
に接続

まし	ましか (ませ)	○	まし	まし	ましか	○	反実仮想 推量 ためらい
----	-------------	---	----	----	-----	---	--------------------

- ① 反実仮想：(〜ダツタラ：ダロウニ)
(現実と反対のことを仮に想像してみるという意味)
- ② 推量：(〜ダロウ・〜ソウダ)
- ③ ためらい：(〜シヨウカシラ)

ましかばーまし
(ませばーまし) (モシ)〜ダツタラ：ダロウニ
せばーまし(和歌のみ)

右の三つの形は絶対暗記(空欄補充問題でよく出る)

※「疑問語・や・かーまし」はためらいの意志(〜シヨウカシラ)

・これに何を書か(まし)
(〓これに何を書こうかしら)

・いかにせ(まし)と思し煩ひて
(〓どのようにしようかしらと思い悩んで)

えー打消

くデキナイ

とまれかくまれ

- ① 何はともあれ・ともかく
- ② いずれにせよ
- ③ どちらにしても

とく (疾く)

とう

はやく

夜が更けて（から都に）来るので（少し意識すれば、入ったので、わかるか？ もっと意識すれば、夜が更けてから都に帰り着いたので〓なつかしいわけだよ）、（京の）あちらこちらも見えない。（それでも）京都に入ったということがうれしい。（私が京都の）家に着いて、門に入ると、月が明るいので、たいそうはつきりと（家の）様子が見える。（家は）聞いていた以上にどうしようもなくこわれていたんでいる。家に預けておいた人の心も（家と同様に）荒れているようであつたよ。中垣はあるけれども（ここはこう意識しよう！ 預けた人と自分の家の間の垣根はあるけれども）、一軒家のようであるので、（隣人が）望んで預かったのである。そうはいつてもやはり（〓隣の人が望んで預かったといつてもやはり、何回も言うぞ！ 指示語は必ず明白にすること！）、機会があるごとにお札の品物もいつも得させた（〓与えていた）。今夜（長い旅から帰って来たのに）「こんな（ひどい）こと」と、（家の人に、または一緒に土佐に行つた家来たちに）大声で文句も言わせない。たいそう薄情だと思われるが、お礼はしようと思う。

ところで、池みたいにへっこんで、水がたまつたところがある（ここは授業中に俺が言ったことをもう一回思い出せよ。これは隣の家に対する皮肉だよ）。そばに松もあつた。五年六年のうちに千年が過ぎてしまつたのだらうか（これも皮肉だよ、そして、松は千年という常識）、松の半分はなくなつてしまつていたよ（手入れしろ、このヤ郎！）。新しく生えたのが混じつている。大体が（〓松だけでなく辺り一体が）みな荒れているので、「ああ（ひどいなあ）」と人々（または、家来たち）は言う。思い出さないことが何一つなく（〓すべてを思い出して）思い恋しい中で、この家で生まれた女の子（これも授業中に言つたけど、半分常識で土佐で娘を亡くしている）が私と一緒に帰らないので、どんな悲しいことか。船人も、みな子が集まつて大声で騒いでいる。このように（家に帰つてあれこれしている、または、子どもが集まつて騒いでいる）うちに、やはり悲しさに耐え切れないで、こっそりと気持ちのわかつている人（わかるか？ 作者、紀貫之から見て、心知れる人つて誰だ？ 妻だろう。女のふりをして書いているので、こういう書き方をしてるんだ）と詠んだ歌、

（この家で）生まれた子も（一緒に）帰らないのに私の家に（以前はなかつた）小松があるのを（〓生えているのを）見るのは悲しいことよと詠んだ。（それでも）やはり満足しないのであろうか（〓もっと意識しよう。やはり、気持ちが高つたされないのであろうか）、またこのように（詠んだ）

愛していた人（〓娘）が松のように千年も見ることができたならば、遠い土佐での永遠の別れをしただらうか、いやしない

忘れることができず、残念なことが多くあるけれども、（ここに）書きつくすことはできない。ともかく（このようなものは）早く破り捨ててしまおう。